

サモアで開催された学校ハンドボールプロジェクト

山田永子

<プロジェクトについて>

国際ハンドボール連盟（以降 IHF）は国際的なハンドボールの普及活動のひとつとして、「Handball at School」プロジェクトを2010年に発足した。このプロジェクトのねらいは、学校体育でハンドボールを教材とする授業が展開できる人材を育成することであり、その結果として特に若い世代の子供たちにハンドボールを経験してもらい、ハンドボール愛好者が増えることを期待している。このプロジェクトが発足した背景には、近年のスポーツクラブの経営難によるチームの解散や規模の縮小、そして主にハンドボール経験者しかハンドボールを指導しないという現状があげられる。それらの解決策として IHF は、スポーツクラブに依存することなく世界中の学校体育でハンドボールを紹介していくために、体育教師にハンドボールの指導ノウハウを提供するプロジェクトを開始したのである。

2010年12月に IHF が講習会を招致したい国を募ったところ、オセアニア2か国、パンアメリカ5か国、ヨーロッパ5か国、アジア16か国、アフリカ17か国、合計35か国から申し込みがあった。翌年7月から12月までの間に15か国で講習会が実施され、2年目に当たる2012年には17か国での実施を予定している。講師に関しては、ヨーロッパから12名、アジアから2名、南アメリカから2名、アフリカから1名の合計17名がプロジェクトのワーキンググループによって選出された。

2011年4月に IHF の本部（スイス、バーゼル）で講師を対象にしたセミナーが実施された。そ

こではプロジェクトの目的と講習内容の共通理解が図られ、また現地担当者との打ち合わせ事項など事前準備に関する話し合いが行われた。さらに、シンガポールで試験的に実施された講習会の様子が報告され、ハンドボールが普及していない国、文化の異なる国で講習会を実施する際に起こりうる問題と対策などが話し合われた。

今回、私は講師としてそのプロジェクトに関わることになった。派遣先はサモア独立国（以降サモア）で、派遣期間は2011年11月20日～12月5日であった。サモアは赤道の南1200km、南太平洋の中心に位置し、日本との時差は20時間。2011年11月20日に成田国際空港を出発し、ニュージーランドのオークランドで乗り換えて、11月21日の夜中1時にサモアの首都アピアに到着した。

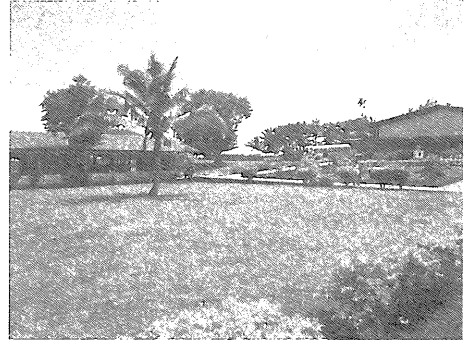
<南国サモアに到着>

じめっとした温かい空気、見渡す限りのヤシの木。空港に降り立ってから出会う人たちはみな大柄（元大関の小錦がサモア出身である）で、どの人も力士になれそうに見えた。空港を出ると、サモアハンドボール協会の人たちが私を迎えに来てくれていたのでもっと安心した。空港から街まで移動する間、サモアハンドボール協会の理事であるヘミさんが、サモアはとても穏やかでゆっくりとした時間が流れている国であること、サモアハンドボール協会は発足したばかりでスタッフが彼を含めて5名であることなど様々なことを紹介してくれた。到着したその日は、街の中心部にある JICA（国際協力機構）



サモア

のオフィスを訪れ、現地の生活で注意する点などを聞いた。サモアではよく虫に刺されることがあるが、湿度が高いために刺された跡を搔くと傷口が膿むことや、JICAのボランティアでサモアに来ている日本人は皆、住み始める時期に腹を下しているの水道水は飲まないほうがよいこと、そして医者はあてにならないから体調は万全にすべしという情報を得た。夕方に街へでてみると、空き地で子供たちがラグビーをしていた。サモアでは学校が2時ごろまでに終了する。現地の高校生の話では、テスト期間は時間通りに生徒が登校するが、それ以外はあまり時間を気にせずしばらくと登校するようだ。子供たちが学校以外の時間をどう過ごしているかという、放課後に一旦帰宅して食事を済ませ、それから所属する教会に出かけて行って、ラグビーやバレーボールをしたり、お祈りをしたりして過ごしている。わたしが訪れた時期はクリスマス前だったので、教会ではクリスマスパーティーの出し物（ダンスや合唱）の練習が夜遅くまで行われていた。ここサモアでは、多くの人々がキリスト教徒で、日常生活の重要な憩いの場として教会が機能していた。



サモアの学校



教会歌の練習

<講習会>

第1回目はLFC高校の教員6名と生徒30名、第2回目はCCCS大学の教員8名と大学生35名が受講し、それぞれの学校で3日間にわたって講習会を実施した。最終回は、地域の教会で子供たちに集まってもらい、ミニゲームを中心にハンドボールを紹介した。サモアではスポーツと言えばラグビーである。どこの学校にも芝生のラグビー場があるが、ほかの運動施設は見当たらない。屋根つきの講堂があったが、屋内では暑くて5分といられないため、ラグビーコートで実技を行った。もちろん、ハンドボールゴールもなければ、コーンなどもなかった。そのため、近くに落ちていたタイヤをゴール代わりに設置し、サンダルなどをコーン代わりにした。ここでは体育の授業も制服のまま、サンダルまたは裸足で行うようで、男子生徒も女子

生徒もスカーフを腰に巻いた格好で実技をした。時折、スカーフにボールが引っ掛かるが、細かいことは気に留めずに汗びっしょりなるまでボールを追いかけていた。生徒たちは非常に意欲的で集中力があり、ルールを覚えるのが早く、基礎的なシュート、フェイント技術はすぐにマスターした。また、空中でのボールの奪い合い、身体接触による競り合いを好み、ミニゲームは非常に白熱した。初日の実技内容は以下のように実施し、2日目以降はミニゲームを中心にした実技に加えて、公式戦の様子やゴールキーパーの基礎技術を紹介する講義を行った。講義は、コンクリートの上に柱と屋根だけで造られるサモア独特のサモアンハウスで行った。

初日の講習内容

- 10:30～11:00 ボールハンドリング
- 11:00～11:30 基礎防御（ルール解説、基本姿勢、動き方、ボールカット、方向付け）
- 11:30～12:00 基礎攻撃（ルール解説、ドリ「スポーツボランティア」ブル、パス、パスフェイク、フェイント動作からジャンプシュート）
- 12:00～13:00 ミニゲーム

<ハプニングの連続>

本来ならば、今回の講習会は体育教師を対象に実施されるものであった。しかし、ここサモアでは交通手段が整備されておらず、先生も生徒もスクールバスを利用して学校へ通っており、どこかで講習会を開催して、先生方に集ってもらうことは難しかった。さらに、サモアでは講習会の受講者側が主催者側に交通費や手当てを要求する慣習があるため、それらを支払う資金が協会にないという理由から、一校一校訪問して講習会を開催することになった。また、11月末がサモアの年度末で卒業式シーズンで



サモア 1



サモア 2



サモア 3



サモア教会

あったことから、当初の講習会の予定が何件かキャンセルになり、予定は未定の日々が数日続いた。

さらに、現地で困ったことと言えばボールがほとんどなかったことである。今回の講習会を実施するにあたり、IHFからボール60個と200冊程度の指導書がサモアに送られていた。しかし、現地に行ってみると指導書はあっても、ボールが数個しかなかった。なぜかという、届いたボールに関税が課せられてしまい、その関税を支払えないために、いまだに空港にボールがあるという。今回の講習で使用したボールは2009年にIHFが寄付したものだ。理事のヘミさんは、「もらったのがまだ残っていてよかった。」と楽観的……。少しでも多くの人に長くハンドボールに触れてもらいたかった私としては、非常に残念だったけれども、実際にはサモアハンドボール協会の中でヘミさんだけが仕事をしている状況だったため、今回の講習会全般を円滑に運営できないのは無理もないというのが率直な感想である。

<環境を整える試み>

帰国前には理事のヘミさんとスポーツ省を訪問し、スポーツ施設大臣やオーストラリア、ニュージーランドからのスポーツ普及スタッフと面会、またサモアの新聞社サモアオブザーバーを訪問しハンドボールを紹介した。今回の訪問を通じて、その国に根付いていないスポー

ツを育てていく難しさを痛感した。国からの支援もない、協会の資金や人手がない、施設や用具がない、知名度がない、ないないづくしであるが、始めはどこもそうであるはず。2012年はほかの国に派遣されることになるが、サモアで経験したことを次の訪問に生かしたい。サモアのハンドボールに対して、今回の私の訪問はとても小さな影響しか及ぼさなかったと思う。けれども、ヘミさんと出会った縁を大切に、これからもサモアの人々、自然環境、生活スタイルに適したハンドボールの普及のお手伝いをしていきたい。そんな小さなウェーブを繰り返して、サモアにハンドボールが根付くことを願っている。

国外のスポーツ環境に触れるたび、日本のスポーツ環境を再認識する好機になっている。このような貴重な機会を与えてくれたIHFに心より感謝したい。



スポーツボランティア